

適正規模のまとめ②

《基本的な考え方》

- ☆ 人間関係の育成や学習指導の面から、一定の教育集団を形成できる児童生徒数・学級数であること。
- ☆ 円滑な学校運営が行えるとともに、充実した学習指導が行える教職員数であること。
- ☆ 特別教室の利用など施設面で支障を生じない学級数であること。

《適正規模を考える視点》

視点	適正規模の考え方	小学校 中学校
人間性・社会性の育成	交友関係や価値観が固定化することを防ぐため、 全ての学年でクラス替えが行える	12学級以上 (各学年2学級) 6学級以上 (各学年2学級)
学習	クラブ活動や部活動などで、 児童生徒に十分な選択肢を用意できる	12学級以上 (各学年2学級) 9学級以上 (各学年3学級)
教員配置	同学年の複数の教員による協力・支援体制の確保、 特に中学校では、 5教科に複数の教員、 実技系教科に正規の教員を配置できる。	12学級以上 (各学年2学級) 9学級以上 (各学年3学級)
特別教室と時間割	教科の授業時数から、 特別教室の使用に支障を生じない	18学級以下 (各学年3学級) 18学級以下 (各学年6学級)
施設整備における国庫補助	施設整備で国庫補助を受けるための、 補助基準に適合している	6~30学級 3~30学級

《適正規模のまとめ》

◎適正化が必要な規模(小規模校)

小学校：11学級以下 中学校：8学級以下

◎望ましい規模

小学校：12学級～18学級
中学校：9学級～18学級

◎施設整備等に対応する規模

小学校：19学級～30学級
中学校：19学級～30学級

◎適正化が必要な規模(過大規模校)

小学校 及び 中学校：31学級以上

学級数の将来的な見込みを検証